

**\*キリスト教学演習\*\*\***

<前回：オリエンテーション>

- A. テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む  
B. テキスト

Paul Tillich, *Frühe Vorlesung im Exil (1934-1935)*

(Ergänzungs- und Nachlaßblände zu den Gesammelten Werken XVII, De Gruyter, 2012)

C. 成績などについて

- ・平常点による。(受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。)
- ・使用するテキストについては、コピーを配布する。
- ・参考文献：授業中に紹介する。
- ・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加(参考文献による復習を含め)を期待したい。質問は、オフィスアワー(火3・木3)を利用するか、メール(アドレスは、授業にて指示)で行うことができる。

D. 授業(予習+出席・発表+復習)の進め方

1. 演習参加者の役割

- (1) 授業前：読み・訳す・分析する → 問題点・補足事項。
- (2) 授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。
- (3) 授業後：残った問題を検討する。

<導入講義1> (2016年度の特設講義1bより)

**8. ティリッヒとハイデッガー**

(1) 問題状況・思想状況

1. 第一次世界大戦以降の思想状況：19世紀的な近代的知を超えて

19世紀(近代)：歴史主義(自由主義神学・人文社会科学)

と超越論思惟(カント哲学、新カント学派。諸学の哲学的基礎づけ)

↓

現象学運動と弁証法神学：19世紀的歴史主義への批判

2. ハイデッガー『存在と時間』：基礎的存在論(人間存在から存在へ。形而上学の再構築)

人間学としての評価 → ブルトマンの場合

3. ティリッヒ『社会主義的決断』(1933年)の冒頭。

政治思想は人間理解にその根拠を求めねばならないと述べ、ハイデッガーの『存在と時間』を参照しつつ、「世界—内—存在」における被投性と企投に対応する二つの問いを取り上げている。一つは、自らの存在の「どこから」を問う問いであり、存在の「起源」の問いである。もう一つは、存在の「どこへ」の、存在の「要請」の問いであり、それは起源の閉域を突破するように促す。この二つの問いが政治思想として展開するところに、政治的ロマン主義と自由主義・社会主義の二つの系譜が成立し、ティリッヒは自らの宗教社会主義を、社会主義と起源の力の再統合として提示する。

4. ハイデッガーの思想展開、『存在と時間』の中断。

ハイデッガーの「存在」

存在と存在するものの存在論的差異 → 存在忘却

存在の歴運・歴史性（存在史）、真理論

形而上学批判から形而上学とは別の思惟へ

西洋の思惟の総体としての「存在—神論」(Onto-Theo-Logie)

ティリッヒ「カイロスとロゴス」(1926年)

真理の歴史性、超時間的な真理ではなくカイロスにおける真理（ロゴス）

ロゴスの現実化の時間性、存在の歴史性（存在史）

5. ハイデッガーの存在と神との関係？

哲学として神について語るには禁欲的、聖書的背景にも沈黙。

## (2) 聖書の神と形而上学的神との緊張関係

6. 聖書的な神と形而上学的思惟との緊張

ティリッヒ『聖書の宗教と究極的實在の探究』:

聖書的な思惟とギリシア的哲学的な思惟（形而上学）との差異性あるいは緊張関係を明確にした上で、「両者が究極的な一致と深い相互依存性を有している」(Tillich, 1955, 357) ことを明らかにする。

7. 「聖書の宗教」: cf. カール・バルト: 啓示（神の働き）←→宗教（人間の営み）

8. 古代ギリシアという源泉において見られた哲学＝存在論

この問いを組織的に考え抜く努力としての哲学（存在論）は不可避的。聖書の宗教も存在論と無関係にとどまることはできない。

9. 聖書の「人格主義」(personalism):

「人格」とは、「自己自身と、また世界とに関係づけられ、またそれゆえに、理性、自由、そして責任を伴う」、「人間的領域での個別性」(ibid., 366) ——いわゆる「我—汝」関係の主体——を意味する。あらゆる宗教において、「聖なるもの」(信仰において志向されたもの＝信仰対象) は人格的な存在として経験される。

10. 人格主義: 神を個別性において、つまり、「一存在者」として経験する。

存在論的思惟: 神概念。「存在自体」(Being-itself) は「存在する一切のものに現前し、一切のものは存在に参与」(ibid., 368) している。存在論的な問いにおいて、人格的な神の個別性は超越される。

「存在論は一般化し、聖書の宗教は個別化する」(ibid., 371)。

11. 「神—人間」における相互性。

12. 言葉。

13. 祈りにおける神は、通俗的な人格イメージを越えた存在であり、むしろ存在論的思惟と接する地点に立っている。

問われているのは、個々の諸存在論が共有する存在の問いなのである。

14. キリスト教を規定する二つの伝統である聖書の人格主義と存在論的思惟との関係。

「存在論的な問いを問うことは避けられない課題である。パスカルに抗して私はいふ、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と哲学者たちの神とは同じ神である。神は人格であり、また同時に、人格としてのそれ自身の否定である。」(ibid., 388)

15. ティリッヒ「神の存在は存在自体である」。

「神が存在自体である」と言えるか？ 聖書の宗教と哲学（存在論）との差異。

人間の自らの存在についての問いへの答えとしての「神」象徴。「神」は存在への問いに

に対する答えである、その点で、「神」の存在は存在自体（存在の根底・存在の力）。

### (3) ハイデッガーと聖書的思惟との関係

#### <参考文献>

- ・『社会主義的決断』（『ティリッヒ著作集 第一巻』白水社）。
- ・「カイロスとロゴス」「実存主義」「実存主義的思惟の本質と意味」「近代的思惟における疎外と和解」（『ティリッヒ著作集 第三巻』）
- ・『聖書の宗教と存在の問題』（『ティリッヒ著作集 第四巻』）。
- ・『組織神学』第一、二、三巻、新教出版社。

#### <導入講義2>

A. 藤田正勝「一九二〇年代のヨーロッパの哲学と日本の哲学の形成・発展」

（京都哲学会『哲学研究』592、2011年）。

B. 近藤勝彦『キリスト教弁証学』教文館、2016年。

はじめに

序章 弁証学の課題と方法

第一部 人間学の文脈におけるキリスト教の弁証

はじめに

第一章 近・現代におけるキリスト教の弁証の概観

第二章 無神論の挑戦、その根拠と残された課題

第三章 「人間の条件」(Condition humana)を求めて

第四章 人間における神的なものへの憧憬

「キリスト教信仰の真理主張は、まず「人間学の文脈」において試みられる」、「近・現代」「キリスト教」「基本的に優先的な扱いを必要とする」

「この啓示認識による真理が、人間学的文脈においてどのように弁証されるかという問い」(51)

「人間の自己意識、精神、倫理意識、宗教意識、理性といった地平が真理確証の地平となり、その認識方法としては心理学や理性批判が重要になった」(52)

「近代におけるキリスト教の弁証は、教会や聖書の権威、あるいは伝統やドグマに依拠するところから直接試みられるのではなく、人間学的意識を共通の基盤としながら進められた」、「倫理学によるキリスト教の根拠づけと宗教哲学による根拠づけ」(53)

「「啓示」の認識が、「人間学的権利」を持っていることを主張するという限定的な課題」(55)

「宗教の人間学的な還元や解消に対して、それには人間学的な妥当性がないことを示すこと」「人間を理解することは、神的なものとの関わりを欠いては不可能であることを主張

し得る」、「キリスト教的信仰と神学とは、人間の人間存在にとって本質的な事柄に関わり、決してどうでもよいものでないことが示される」(57)

「宗教批判」の形を取った反宗教的な無神論「フォイエルバッハ」(61)

「マルクス」(62)

「人間学的に言って人間の本質構成的な必然性が示されているのではないかと問うべき」「人間の本質構成的な要素として宗教的投影の不可避性」「人間の自己超越的精神の本質的構成契機として神的なものとの関係、宗教的なものの投影や表現の必然性」(65)

「バルト」「フォイエルバッハの宗教批判」(66)

「神学が実は神と人との関係は本来転倒不可能なものと言ったとしても、その人間との本来転倒不可能な関係にある神もまた人間学的述語であると言われるだけで、フォイエルバッハの批判を克服したことにはならないであろう」(67)

「カール・バルトの神学形成は、キリスト教弁証学を拒否し、キェルケゴール的人間学をも払拭して、神の言葉からの端的な出発に神学を限定していった」(69)

「明白な弁証学の拒否」(70)

「ヘーゲル」「その哲学的努力はキリスト教信仰の哲学化」「キリスト教と哲学の総合の試み」(73)

「ニーチェ」「ハイデガー」(74)

「ニーチェのラディカリズムが持っている誠実さ」「能動的ニヒリズム」(76)

「人間学的宗教批判」による無神論」「権力の意志」による「能動的ニヒリズム」の無神論、「第三の思想傾向」「反抗的無神論」(78)

「ドストエフスキー」「イワン・カラマゾフ」(79)

「胸に地獄を抱えながら、どうしてこの世界に留まり続けるのか」、「弟アリョーシャというキリスト教的人格がこの世界にいること」「人間はやはり救いを必要としている」(80)

「カミュ」「反抗」が存続するのは、正義が生き、愛が生き続けてる限りにおいて、「反抗それ自体が隠れた弁証学、逆転した弁証学であること」(81)

「無神論のこの人間神格化に対し、弁証学は偶像崇拜の拒否、被造物神格化の拒否の闘いでなければならない」(83)

「仏教的な無神論の立場」「久松真一」(83)

「マックス・シェーラー」「ヘルムート・ブレスナー」「アルノルト・ゲーレン」「生物学の成果を吸収しながら人間に関する一つの新しい哲学的な学科としての「哲学的人間学」の成立を見た」(88)

「キリスト教弁証学にとって重大な対話、評価と批判の可能性」「人間の本質の適切な理解をめぐって論争的な闘い」(89)

「シェーラーにおける「世界開放性」

「世界開放的精神」「ドイツ観念論の影響」(92)

「パネンベルク」「世界開放性」と「神開放性」とを同一視した」「無限に何かに差し向けられていること」(93)

「精神的存在としての人間の定義によって「人間学的な宗教的アプリアリ」を主張したわけである」(95)

「ブレスナーにおける「脱中心性」「自己所有」「人間は自己自身を所有し、自己を知り、

自己自身を認識する」(97)

「純粹自我による反省の成立の説明」(98)

「ゲーレンにおける「欠陥生物」「ヘルダー」

「人間学が人間の本質として示す文脈の中に、神学の啓示の語りは、場所を持つことができる」(104)

「自己超越的な精神的活動」(106)

「「秩序ある世界」と「信頼できる仲間」が人間の生存の根拠」「さらにそれを超えたものからの支持を求める」、「人間は歌う存在である」(107)

「人間が宗教的次元を持ったということと、宗教的次元が人間を人間にしたということ、この両者は同時に生起した」(108)

「啓示による神認識は、人間学的憧憬の文脈からすると、人間学的必要に応えている。人間の憧憬が方向づけられていること先は、啓示によって修正されつつ答えられる。人間の憧憬は啓示の権利を承認し、啓示は人間の憧憬を修正し、成就する」(109)

「ピーター・バーガー」「超越のしるし」(110)

「希望という人間学的現象」(111)

「人間は祈りを持っている存在である」(112)

「アウグスティヌス」「意志の転倒による罪の前提には、常に相対的により低次の善があると主張された」(118)

「順序の逆転」「バルト」「罪論を和解論の中に位置づけ、キリスト論に従属させた」、「罪が人間にとって何を意味するかということは、イエス・キリストが認識されることによって認識される」、「われわれもこの立場に立つ」、「キリスト論に導かれた罪の認識」(119)

「死の事実が開示する人間存在の宗教的次元にその真理性主張の権利地平を人間学的な仕方を持ちながら、キリスト教信仰はその真理性を啓示の真理として明らかにする」(123)

「主観が意味をあらしめるのではなく、意味ありとの信頼の中で主観は形成される」(126)

「パネンベルク」「「終わり」における「意味の決定」「歴史の現実全体の終わり」(127)

「この神学的認識によれば、意味の決定は、終末論主義的に理解されるべきでなく、意味の決定者であるキリストによって理解される」(128)